

---

# ゆうやけ

SORA

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆうやけ

### 【Nコード】

N3939A

### 【作者名】

SORA

### 【あらすじ】

受験勉強に段々と疲れて、日々の生活にも段々と興味がなくなってきたコンは、高校入学の時から問題児とされてきたユキとクラスがえて初めて同じクラスになった。初めはどう接して良いかわからないコンだったがある日、初めてユキと話しユキへ抱いているイメージを一転させる。そして、段々とユキへの想いを募らせて少しずつだが近づいて行く。

## ブローグ

高校に入学してもう2年がたち、今年私は高校三年生になる。  
『今年は受験がある…もう遊んでは居られない…』と、そう決意して日々勉強に励んでいた。

だけど…

さすがに勉強ばかりしていると気分も段々と落ちてくる…

そして、私の気分同様成績も段々と暗い泥沼にはまっていった…

だけど、そんな中でも私は勉強をすることを諦めなかった。だが、嘗ては明るく感じていた生活の色が段々と日に日に色褪せてゆくのを感じている。

毎日同じことの繰り返しで時間に追われる生活を学校という場所で行く内に自分の今の状態を他人事のように捉えゆくように為った…。

そして同じことの繰り返しであろう日が今日も静かに始まった…

## 第1話：桜

高校三年の春、今日は新しいクラスが張り出される日だ。新学期  
そうそう遅刻なんて出来ないから早めに起きた。昨日一日中降って  
いた雨も止み今日は綺麗に晴れている。起きてすぐにベット脇の力  
ーテンを勢いよくあけついでに窓も開けると、窓から朝特有の清ん  
だ空気とともに春の匂いがやわらかい朝日とともに部屋の中に入っ  
てきた。

しばらくの間、窓辺に寄りかかり外を眺めていると、綺麗に咲い  
ている小さな桜の木が目に入った。

昨日一日中降っていた雨でほとんどの桜の花びらは散ってしまっ  
ているのに、どうやらこの小さな桜は例外のようだ。

遠目から見ている私にも解るくらいにその桜は、花びらに溜った朝  
露を朝日が反射してキラキラと輝いている。

ぼーっと、目を奪われていた私だが隣の部屋の住民の目覚まし音で  
ハッと、現実に戻された。急いで時間を確かめると、どうやら結  
構な時間がたってしまったようだ。驚いた私は急いで顔を洗い  
見慣れた顔にいつもより少し念入りにメイクをする。そして、下ろ  
し立ての制服に急いで腕を通して昨日の晩に用意してあった鞆を掴み  
外へ飛び出した。

携帯を開き時間を再び確かめると友達との待ち合わせの時間まで  
なんとか間に合いそうだ。だが、念のために待ち合わせ場所まで走  
って行く事にした。

走って行くと、すでに友達は来ていた。

「おはよう 久しぶりだね あいかわらず今日も綺麗だね。」  
そう言ってきたのは、中学の時から親友後藤舞。ピンクベージ  
ユのフワフワのショートにリス顔の笑顔の可愛い子だ。

「おはよう 舞。朝から元気だね。」

「えっ だって今日はクラスがえの日だもん コンと同じクラスに為れたら嬉しいけど…何気に高ちゃんと一緒に為れたらいいな  
っってね」

「あゝ成程ね 一緒に為れたらいいね」

「うん」

そんなたわい無い話をしながら私は舞と一緒に学校にいつもと同じように、同じような話をしながら向かった。

## #第2話

学校に着くとすでにクラス割の紙が張り出されていた。嬉しいことにまだ人の数も少なくゆつくりと自分の名前を探すことが出来る。私の通う学校は結構大きな私立高校で、一学年1,000人も居る。そのため、自分の名前を探すのも一苦労なのだ。

（去年は人ごみの中モミクチャになりながら探したっけなあ・・・）

と思いながら辺りを見渡し、一先ず二手に別れて探すことなり端のボードの前に行く事にした。ボードの前に行くとたくさんの人の名前が綺麗に並んでいる。誰か知り合いの名前でもあるかな？と思い探してみたが自分の名前を探すのが先だと思い直にやめた。

探し初めて何枚目かのボードに目を通していたら舞の自分を呼ぶ声が聞こへ、急いで彼女のもとへ向かった。すると、自分の目の高さ位の所に綺麗に並んで載ってあった。だが、一緒に登校してきた舞の名前が同じクラスにはなかった・・・

「舞の名前がないね・・・」

「あたし隣の隣のクラスだからへいきだつて!!」

「そうなの！ならいつか。あつ！高ちゃんと一緒だった？」

「そう！それ！運命だね！一緒だったの！やった！」

「マジ！良かったジャン！ならあたしは・・・」

クラス割の紙に目を通すとある名前で目が止まった。

「舞・・・あたしアイツと同じクラスだ・・・」

（ありえない・・・）

「えっ マジで！良いな。あ、でもコンはアイツあんまり好きじゃないんだっけ？」

「うん・・・まあ。」

「なんで？アイツめっちゃカッコイイじゃん」

「カッコイイ・・・ねえ・・・」

(ありえないでしょ……まじで)

(かんべんしてよ……)

( )よりによってアイツだなんて・・・( )

(  
(  
な  
ん  
で  
.  
.  
.)  
)  
)

(  
(  
な  
ん  
で  
.  
.  
.)  
)  
)

(  
(  
な  
ん  
で  
.  
.  
.)  
)  
)

なんで水島雪あんと一緒なのよ……

### 第3話

ミス・マユキ

水島雪。学校一の問題児だといわれてる。何故アイツがそう呼ばれるかと言うと、それはアイツの容姿にもあるのかもしれない。

アイツは、本当に綺麗な赤茶色の髪の毛で、金色に近い色の瞳を持っている。そして、形の良い顔のパーツが綺麗に小さなアイツの顔におさまっているのだ。最初にアイツを見たのは、確か入学式だった気がする。

すでに式が始まり、残り時間もわずかという処でアイツは遅れてやって来たのだ。送れて来たアイツを見た女子生徒や女教師たちの大半は一瞬にしてアイツに恋をしたらしい……。だが、私は違った。遅れて来たにも関わらず、制服を着崩し、目立つ髪をワックスで程よく立たせ、生意気そうな顔をして体育館に入ってきたアイツの態度が私は無償に気に食わなかった。一方的な私からの感情なのだがコイツとは絶対に合わないと思った瞬間だった。そして、入学して次の日からアイツの噂を良く聞くようになった。それは全部、あまり良いとは言えるようなものでは無かったのだが、何故かアイツの周りにはいつも多くの人がいて華やかな場所には必ずアイツがいた。

そんなアイツと同じクラスになってしまった私は、友達の舞と一緒に途中まで教室に向かった。教室に近づくにつれて意外にも早く学校に来ている人達が私達と同様に結構いたようで人の騒がしい声が聞こえてきた。舞とは私のクラスの前で別れて一人で教室の扉を開けた。すると、高校一年生だった時のクラスメートであった後藤亮とその友達らしい何人かが私に気づき声をかけてきた。

「おっ！近藤じゃん。また同じクラスだけどよろしくな」

「笑」亮ちゃん変わんないないね。あたしもよろしくね」

亮ちゃんとは結構仲が良くて、よく話もしている。それに亮ちゃん



は、数少ない私をあだ名で呼ばない友達なのだ。前に何故あだ名で呼ばないのかと聞いたら、

『せっかく名前があるんだから名前で呼ばなきゃなんか可愛そうかな』って思ったんだよね（笑）

と、はにかみながら私にそう言ってきた。亮ちゃんは、高校三年生の男子にしては、背も小さく声も若干まだ高い、それに女顔だ。よく女子生徒に髪の毛とかを結んでもらっているみたいで今日も前髪をカラフルなピンで留めている。

「亮ちゃん、今日もなんか可愛いね」

「近藤く可愛い言わないでよ。今度からカツコイとか素敵！とか惚れる！って言って」（笑）

「はいはい。」

と、何気ない会話をしていてふと気になり話題をきりだした。

「亮ちゃんの席ってどこ？」

「うん？俺？俺は一番前の一番端の廊下がわの席・・・背うちこいから前なんだ（泣）。近藤確か窓

際だったよ。」

「本当！ならちよつと見てくる」

そう言って彼のそばを離れ黒板に張り出されている座席表を見ると窓際の後ろから二番目の席だった。（やった！じゃあ隣は・・・）自分の名前の隣を見ようと視線をずらそうとした時

ガラ！！ 教室に誰かが入ってきて自然と扉の方をみると亮ちゃんに八重歯をみせ仲良さそうに笑い、挨拶を交わすアイツが目に入った。驚いて二人を見てみると、そんな私に気がついたのか亮ちゃんが私を紹介し始めた。

「ユキ！あの子俺の友達の近藤沙希ちゃん 仲良くしてね」

とニコニコ笑いながら亮ちゃんは満足そうに私を見てきた。すると亮ちゃんの隣にいるアイツが私を見る。一瞬で嫌な汗をかき出すわたし・・・

「あつ！俺この子しってるわ。確かコンって呼ばれてるやろ？俺のことはユキって呼んでな（笑）」

というときアイツは笑いかけてきた。（（うわ・・・））

「あ・・・はい。」

とそっけなく返事を返し二人を避けるため再び視線を黒板に戻すと、亮ちゃんの声が耳に入って嫌でも来た。

「近藤くそっけなさ過ぎですよ」（笑。まあ、席となり同士だから仲良くな」

そう、視線を再び戻した私の目に映ったのはアイツの名前が私の名前と並んで載っている信じられない映像だった。

「あつ！そうなん？じゃあヨロシクなあ」

アイツの声がムカツクほどよく私の頭の中で響いた。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3939a/>

---

ゆうやけ

2010年12月14日18時25分発行